

論文

動詞のあとにくる“到/在/给”は介詞か

荒川 清 秀

内容提要

石毓智认为汉语的介词是连谓式的第一动词通过语法化、失去动词的部分特点而形成的。所以，介词应该带宾语之后修饰后边的动词或形容词短语。但是，也有些学者主张把动词后边的类似成份比如“到 给 在”也做为介词讨论。本文对此质疑。太田辰夫认为，就古代汉语而言，如果把用在动词后边的“于、乎、以”当作动词的词缀，古代汉语中就没有介词了。而作者认为“于”字的现代汉语形式——“到 给 在”，用在动词后边时也没必要做为介词，而可以认为是用做（准）补语的动词（当然保留了一些语法化的痕迹）更妥。

关键词：介词、古代汉语介词的特点、介词漂移说、介词结构还是补语、动词后边的“到/在/给”

0 はじめに

介詞フレーズは動詞の前にきて状況語になる以外に、動詞の後にきて補語にもなると考える人は少なくない。本稿は、この動詞のあとにくる「介詞フレーズ」の存在を否定しようとするものである。

方言文法研究などでは、介詞フレーズの「補語用法」が当然のこととして論じられ、動詞のあとにくる成分を動詞として認めるばあいでも「虚化して介詞になった」（重新分析）という。たとえば、李如龙等2000: 54は、動詞のあとにくる“着”を、「もとは動詞であり、付着の意味であったが、そこから意味が派生して存在義を表し、かつ虚化して介詞になった」（潘悟云）という。動詞のあとに用いられる動詞に虚化が起こることは、ヘッドではな

い成分，結果補語や方向補語にみられる普遍的な現象であるし，古典中国語の介詞“自、于、以”が現代語で接辞化した現象とつながっている。しかし，そのことをもって，動詞に後置される動詞が虚化して「介詞」になると考えることはできない。

1 古典中国語の介詞“自、于、以”

古典中国語において“於”のように，動詞の後ろに用いられる介詞が存在したのは事実である。そして，それがのちに動詞の前に移動したと考えられ，それが中国語の大きな語順変化の一つと見られている。しかしすべての介詞がそのような変遷をとげたわけではない。たとえば『論語』の文法を分析した太田辰夫1964: 77では，

(I) 介詞フレーズ+述詞 於以用自与为无

(II) 述詞+介詞フレーズ 於乎以

のように，“於乎以”を除けば他はすべて述詞の前に用いられる。動詞の後ろにくる介詞のほうが少数なのである。しかし，量的には過半数を占めるといえる。太田1964: 77によれば，『於』『乎』のうちの名詞性成分を介詞の目的語とせず，その前の述語（動詞）の目的語とするという。それは，太田1964: 18によれば(II)で動詞に後置して用いられる“於乎”の付き方については法則が見いだしがたいものが多いからである。たとえば，次の動詞はあとに目的語を伴う際，“於”を取る場合もあればそうでない場合もある。

1) 人(於) 庙/学(於) ~ / 见(於) ~ / 告(於) ~

そこで，太田は，もし“以”を動詞の接辞とすれば「普通の介詞は(II)に用いられないことになる」とまでいう¹⁾。また，周知のように，

2) 问於孔子(孔子に問う)

3) 问孔子(孔子を問う)

は『論語』や『左伝』でははっきりとした区別があったが，『孟子』や『史記』になると，その差は消えてしまう。動詞の後にくる“於”の減少は，ただそれが前置されたというだけではなく，消えてしまったものも多いのである。何乐士2005: 241～，249～によれば，動詞の後ろに来る“於”は『左伝』から『史記』で大きく減少している。その理由としては，上でも述べたように，本来動詞の後に用いられていた介詞が消えたことと前置されるようになったことが大きいという。刘丹青2003では介詞フレーズの前置が場所詞の出現，増加とのかかわりで論じられ，語順変化の少ない中国語において，この変化は特筆すべきこととされている。しかし，移ったのは“於”（のフレーズ）であって，“用自与为”などはうしろに用いられたことがない。“於”の現代語の翻訳ともいえるべき“到、在、给”は動詞の前にもうしろにも用いることができるが，あとで述べるように，動詞の後ろに用いられる“到、

在、给”は介詞と見なすには根拠が薄弱である。

その当否はあとで述べることにして、古典中国語の介詞の多くは、金昌吉1996、张谊生2000らが指摘するように、現代語においてすでに動詞の接辞と化してしまっている。たとえば、次のような場合、「介詞」はすでに複合語の一部になってしまっている。

(1a) “自” —来自 摘自

(1b) “于(於)” —鉴于 基于 忠于 属于 在于 限于 勇于 善于 乐于 对于 关于 终于 至于

(1c) “以” —加以 难以 借以 予以

“往”“向”の場合は、多少の生産性はあるものの、結びつきはかなり固定している。

(2a) “往” —走向 指向 倾向 趋向

(3b) “向” —开往 飞往

2 (V+) “到” “给” “在”

問題は、(V+) “到” “给” “在” で、従来から三つの考え方があった。

介詞説 1) これらは介詞で、介詞フレーズが補語になっている。

動詞説 2) これらは動詞で結果補語になり、あとの名詞は目的語である。

3) 前の動詞とともに複合動詞を構成している。

1) は中国の『漢語課本』以来の考え方であり、古典中国語文法の体系を下敷きに行っている。それに対し2)の説は北京語言学院等、外国人に対する中国語教育から出ている²⁾。ただ、これらを結果補語と見た場合“到”を除き、“在”と“给”は“V不在”“V不给”という可能補語のカタチが取れないので、報告者はかつて3)の複合動詞説をとっていたが、結びつく動詞があまりに開かれすぎているという欠点があるし³⁾、二音節動詞との結合では、複合とはとても言い難い。これらは結果補語の一種(準結果補語)と見なすのが妥当かと思われる⁴⁾。

1) は2) 3) に対するものであるが、金昌吉1996、张谊生2000は、どちらにも根拠があり、“一刀切”(一刀両断)にはできないとする。たとえば、2) 3) にとって有利な根拠は、

4) 放在了桌子上/小明把自己的坐位让给了一位老人

のように、間に“了”が入ったり轻声化することである。“在桌子上”が介詞フレーズだとしたら、間に“了”が入るのはおかしい。

一方金昌吉1996: 68-69、张谊生2000: 120は、

a 他们转移、散布、隐蔽在全国许多地方

b 妙就妙在这里，好就好在他实现不知道

- c 他住在这儿/在这儿住过
- d 将作品游离于理论纠纷之外, 于普通得失之外
- e 牢记在心 跌倒在地

のように、後者を支持すると考えられる例を挙げている。報告者は、aとdは文言的な用法の模倣であり、bは動詞、eの切れ目は音節によるもので、一般の“V在”とは同列に論じられないと考える。cについては後で述べる。

ともあれ、こうした論の多くは動詞のあとにくる“到/给/在”が本来介詞であったという前提から出発している。動詞のあとの“到/给/在”はいかにして「介詞」化したのか⁵⁾。それより、これらは動詞であり、動詞に後置し補語になることで本来の機能を失い、かつ新たな機能を獲得したと考えたほうが合理的ではあるまいか。以下、“到/给/在”を一つ一つ検討していきたい。

3 各論

3.1 “到”

3.1.1 “到～V”

報告者がかつて荒川1988で“到”が介詞かどうかを問題にしたとき、こうした議論は不毛だという意見があった。今思うと、その考えもわかる。たとえば、

5) 我到中国学习汉语。

の“到”は、石毓智2001流にいえば、介詞への契機をもっている。つまり、連動式の第一動詞に用いられることで介詞化していくと考えるのである。また、

6) 到现在我才知道。

のように、“到”に介詞用法があることも事実である。しかし、荒川1988でも指摘したように、

7) 我到书店去买书/我到书店买书去。

8) 我回宿舍去拿钱/我回宿舍拿钱去。

のような他の移動動詞との平行現象を考えると“到～去(来)”の“到”は動詞と解釈した方がよいし、

9) 你到楼上休息一会儿。

のような例も、介詞への契機を認めつつも、まだ動詞であると考えた方がいい⁶⁾。なにせよ、“到”は呂叔湘のいうように、きわめて動詞っぽいのである(呂叔湘1979: 46)⁷⁾。

3.1.2 “V到～”

以上は動詞の前に来る場合であり、動詞のあとに来る“到”を介詞化したというためには別の議論が必要である。カタチが同じだからという理由で、これをも介詞と言えるのかどうかである。

范继淹1968は動詞の後にくる方向補語の“上”類（上下进出回过まで）を二つに分け、“走回（家）”“走上（舞台）”のように、後の場所目的語を省略できないものを介詞性バリエーション（変体）と呼んだ⁸⁾。そして、“到”は他の「動補成分」の中では唯一双方にまたがるものと考えた⁹⁾。

副词性	到 上下 进出 回过 开起 住着 完满
介词性	于 往 向 给 在 到 上下 进出 回过

范继淹は“到”を“上”類の仲間にいれなかった。それは、“到”が“到来”のカタチをもたなかったからである。しかし、刘月华等1983: 345, 刘月华等2001: 546は、“到”をも“上”類にとりこんだ。なぜなら、“到”は“到来”のカタチをもたないだけで、動詞のあとの“到～（来）”は、

- 10) 走回教室（来）
- 11) 走进教室（来）
- 12) 走到教室（来）

のように、他の方向補語になる動詞と全く平行するからである。

なお、“到”“在”“给”の位置の違い（動詞の前後）が意味の違いに反映しないことを、両者の同一性に結びつける論があるが、“到”については、

- 13) 到三点才睡〔三時になって寝る〕/睡到三点〔三時まで寝る〕
- は大きく違う。

3.2 给

3.2.1 “给～V”と“V给～”

“给”では、動詞の前後で意味と用法が似ているものがある。たとえば、

- 14) 给你寄信/寄给你〔あなたに手紙を送る〕
- 给你写（信）/写给你〔あなたに手紙を書く〕
- 给你带来/带给你〔あなたに持ってくる〕
- 给谁打电话/打给谁〔だれに電話をする〕
- 给你介绍/介绍给你〔あなたに紹介する〕

しかし、

15) 给你们介绍/介绍给你们

では、前者は「あなたがたを引き合わせる」場合もある。

16) 给你送钱〔あなたにお金をとどける〕/送给你〔あなたにプレゼントする〕

も意味が違う。さらに、

17) 告诉(给)你/*给你告诉 教给你/*给你教 交给你/*给你交 嫁给你/*给你嫁

のように、後に置けても前に置けないものもある。これは“给～V”と“V给～”の“给”の働きが違うからである。

3.2.2 “V给～”

18) 给你看看/给你尝尝

の“给”は動詞であり¹⁰⁾、「モノの移動」が含意されるが、“V给～”になると、“给”するものは抽象物でもよい。

19) 教给你/说给你听/唱给你听

これは補語になった“给”が新たな機能を獲得したのであって介詞になったからではない。また、

20) 送一本书给你

の“给”はもちろん動詞だが、

21) 打电话给你

の“给”も“打给～”の存在を考えると動詞に解釈できる。

歴史的にいうと、“V给”の発生は遅れた。その前身は“V与”と見られるが、これについても、まず、“V～与～”があって、つぎに、“V与～”が生まれた。“V与”の“与”は動詞であって、これを介詞とみるのは無理がある。“说与～”“唱与～”“教与～”も古くからある¹¹⁾。

3.3 在

3.3.1 “在～V”と“V在～”

“在”についても、動詞の前後で同じように使われているように見えるものがある。

たとえば、

22) 在哪儿住?/住在哪儿?

のように、一見位置を変えることのできるものもあるが、これは“住”が状態動詞だから言えるのであって、静態動詞になると、

23) 坐在哪儿→在哪儿坐着〔どこにすわっているか〕

→在哪儿坐下〔どこに座るか〕

のように、“坐在哪儿”の二義性〔どこに座っているか/どこに座るか〕を反映し、動詞のカタチが変わる。さらに、

24) 掉在地上〔床に落ちる〕* 在地上掉

のように、状態動詞、静態動詞以外では置き換えが難しい¹²⁾。

3.3.2 “V在～”

問題は、

25) 走在大路上/死在哪儿还不一样?/生在北京, 长在天津/生活在一起

のような場合であるが、これらは一種の文言用法の模倣と考えるべきである。

4 おわりに

范继淹1968は、“V回～”の“回”のように、後に場所成分を必要とするものを介詞性変体と呼んだ。同じことが、“V到+時間”や“V给～”“V在～”についても言える。しかし、“等于”“成为”“告诉”“显得”“好比”のように、後の目的語が不可欠な動詞は存在する。したがって、“(V) 给～”“(V) 在～”等を介詞性と考える必要はない。

そもそも、中国語の動詞が補語になった場合、本来の機能をそのまま維持しているわけではない。たとえば、

26) 坐在沙发上 →坐 de 沙发上

のように、補語が軽声化することについてはよく知られている。また、

27) 给你/给钱

が言えるのに、

28) 送给你/* 送给钱

の後者は言えない。介詞の“给”も人しかとらないと思えばこちらも介詞となる。太田1956: 185にも同じ指摘がある。ただし、近世語では、“V与”のあとにモノを取る例はある¹³⁾。さらに、

29) 来日本/* 回来日本 →回日本来 去中国/* 回去中国 →回中国

のように、補語になった“来/去”の後にはもはや場所目的語をおくことはできない¹⁴⁾。

ともあれ、“到/给/在”は動詞の補語になることで動詞としての機能の一部を失い、新たな機能を獲得した。これを文法化と呼ぶのはともかく、介詞化と考える必要はない。

注

- 1) ただし、太田は「一般の文語文法としては、普通の介詞の(Ⅲ)の用法を認めておくことが考えられる」ともいっている(太田1964: 77)。
- 2) 日本では、大内田1968が早くこの問題を論じている。
- 3) 刘丹青2003: 175には“若看做复合词, 很难设想汉人的大脑词库里有这么庞大的一个复合词类聚,”とある。
- 4) 荒川2013: 91は学習参考書であるが、この考えを取った。
- 5) 類義的な介詞でも後にくるものと来ないものがあるのは、その介詞の動詞性の残存度と関係があらう。たとえば、走向世界/开往北京*走朝舞台。
- 6) “用筷子吃饭”や“用汉语说”の“用”は動詞か介詞かという議論があるが、これもこの位置に用いられた“用”は介詞に向かっていると考えればすむ。
- 7) 呂叔湘は“从”が「毫无动词的味道」で、その反義語の“到”とは大いに異なると述べている。
- 8) 場所名詞を取らない“V上”の類はbound formではあるが、これをも介詞というのは英語の前置詞と副詞の関係に引きずられたものではないだろうか。つまり、同じdownでも、He ran down the roadなら前置詞だが、He ran downなら副詞だという分け方である。
- 9) 朱德熙1982: 130は、V到+場所/時間のうち、場所の方は省略が可能だと言っている。
- 10) 太田辰夫1956: 256ではこの“给”を動詞とみている。
- 11) これについては長尾光之1969、志村1984: 附八を参照。
- 12) この問題については盧濤1969が詳しく論じている。
- 13) 志村1984: 380-381に例が挙がっている。
- 14) もっとも台湾「国語」では“回去中国”を許容する。

※本稿はもと日本中国語学会第56回大会(愛知県立大 2006年10月29日)で発表したものである。

参考文献

- 荒川清秀 1988 「“到”は介詞か」『愛知大学外国語研究室報』第12号
 →荒川清秀 2015 『動詞を中心にした中国語文法論集』(白帝社 2015)
- 荒川清秀 2013 『基礎徹底マスター 中国語練習ドリル』NHK 出版
- 大内田三郎 1968 「場所を示す〈在〉について」『中国語学』178
- 太田辰夫 1956 「「给」について」『神戸外大論叢』7-1~3
- 太田辰夫 1964 『中国語古典文法』江南書院
- 志村良治 1984 『中国中世語法史研究』三冬社
- 長尾光之 1969 「与と给の問題点—与の補助動詞化の過程を中心に」『集刊 東洋学』21号
- 盧濤 1997 「「在大阪住」と「住在大阪」」『大河内康憲教授退官記念 中国語学論文集』東方書店
- 陈昌来 2002 『介词与介引功能』安徽教育出版社
- 范继淹 1963 「动词和趋向性后置成分的结构分析」『中国语文』第2期
- 何乐士 2005 『史记语法特点研究』商务印书馆

- 金昌吉 1996 『汉语介词和介词短语』南开大学出版社
刘丹青 2003 『语序类型学与介词理论』商务印书馆
刘月华等 1983 『实用现代汉语语法』外语教学与研究出版社
刘月华等 2001 『实用现代汉语语法（增订版）』商务印书馆
李如龙 张双庆 2000 『介词』暨南大学出版社
吕叔湘 1979 『汉语语法分析问题』商务印书馆
张谊生 2000 『现代汉语 虚词』华东师范大学出版社
朱德熙 1982 『语法讲义』商务印书馆
石毓智 李讷 2001 『汉语语法化的历程』北京大学出版社